

日本機械学会誌
(メカライフ)
執筆要綱

—○ 原稿執筆にあたってのお願い ○—

[原稿送付先・執筆問合せ先]

〒160-0016 東京都新宿区信濃町35番地
信濃町煉瓦館 5階

一般社団法人 日本機械学会
広報情報部会
(メカライフ編修委員会)

TEL (03)5360-3500 (代表)
(03)5360-3503 (会誌編修部会担当)
FAX (03)5360-3508

一般社団法人 日本機械学会

日本機械学会は、“機械に関する学術、技術の進歩、発達をはかり、かつ工業の発展のためにつくすことを目的”として、1897年(明治30年)に創立され、現在、会員約40,000名を擁する国内でも有数の学術団体です。そして、その英語名“*THE JAPAN SOCIETY OF MECHANICAL ENGINEERS*”が示すように、機械技術者の会です。

したがって各会員は、自己の専門とする分野はもちろん、境界領域、他領域の分野についても、活発に学際的討論を行うことにより、新たな知の領域、先端知識を拡げつつ、交流を高めています。

また会員構成も、全国各地の企業(約70%)、大学・高専・短大(約25%)、官公庁研究機関(約5%)と多岐にわたり、産・学・官協同の場として、さまざまな技術交流、情報交換による豊かな結実を見せています。さらに若い学生から、経験豊かな企業の技術者、大学・研究所等の研究者、各分野の第一人者に至るまで、年齢層も厚く、多彩な人材にあふれた同志の集まりとして、常に時代を先取りする総合的技術者の集団であるといえます。

21世紀に入った今、機械工学の基礎分野およびメカトロニクスをはじめ、新エネルギー、環境、バイオテクノロジー、ナノテクノロジー、新素材といった広範な新分野は、ますます産業・経済の基盤として重要視されています。これらの技術への取り組みには、新しい時代の流れを鋭敏に感じ取り、社会のニーズに応える豊かな感性、知のエネルギーが必要となってきます。その意味で、機械に関するあらゆる学際分野の人々の人間としての広い出会いの場』である本会の存立意義は、今後ともいよいよ大きく未来に向けて可能性を拡げるものと確信します。

●日本機械学会誌●

【メカライフ編修委員会:3, 6, 9, 12月号を担当】

(メカライフ誌)

これから機械屋として生きようとしている機械系学生や若手技術者と、機械屋としての原点を見つめ直したい中堅・ベテラン技術者に、機械屋として生きる知恵を提供することを目的として編集をしています。

このメカライフ特集号は本会全会員(約40,000名)に配布されますのでPR効果は大きく、技術トピックスを主に取り上げる一般号とは異なり、読みやすい内容で、非常に好評をいただいております。

【会誌編修部会:1, 2, 4, 5, 7, 8, 10, 11月号を担当】

日本機械学会の理念として、すべての産業の基礎である機械工学および関連分野を研究、応用する人々の集まりである学会として、広く他分野の方々も好んで入会する学会を目指すような編集方針で会誌を発行しています。

会誌の主題目記事は、機械工学および機械工業に関連する、①共通基盤技術に関する記事、②学際、境界領域に関する記事、③最先端のトピックス記事、等を主体としています。

この会誌は、本会全会員(企業約70%、大学・官公庁研究機関約25%)に配布され、研究を行う上で多いに参考になる機関誌です。

●他の出版事業●

『日本機械学術誌』

2014年1月より創刊しました新学術誌は、英文レビュー誌(Mechanical Engineering Reviews)、和文誌(日本機械学会論文集/Transactions of the JSME (in Japanese))、英文誌(Mechanical Engineering Journal)、および、英文速報誌(Mechanical Engineering Letters)の4誌で構成し、「機械」という大きな概念を前面に出すことにより、統合誌としての存在感を高めることと致しました。各4誌は機械工学の全分野をカバーすべく12に集積したカテゴリー「材料力学、機械材料、材料加工」、「流体工学、流体機械」、「熱工学、内燃機関、動力エネルギーシステム」、「機械力学、計測、自動制御、ロボティクス、メカトロニクス」、「マイクロ・ナノ工学」、「計算力学」、「設計、システム、製造」、「生体工学、医工学、スポーツ工学、人間工学」、「環境工学、産業・化学機械、システム安全」、「交通・物流」、「宇宙工学」、「法工学、技術史、工学教育、経営工学など」で構成し、多様化・多層化する社会的ニーズに応えることに致しました。

＝ 機械工学に関する図書の出版 ＝

1934年に初版発行以来、半世紀以上にわたり日本の機械技術者の必携書となっている機械工学便覧(DVD版・冊子合本版・冊子分冊版)をはじめ、テキストシリーズ、機械実用便覧、技術・統計資料、学会基準・規格等を独自の委員会組織による入念な内容検討に基づいて編集・出版をしております。

また、民間の出版社に出版を委託した図書はすでに200点以上にもなっております。

●その他●

集会事業(国内会議・国際会議)、調査研究事業、国際交流事業、学会賞事業、センター事業等々も行っております。

メカライフ について

- 〔1〕 発行目的 これから機械屋として生きようとしている機械系学生や若手技術者と、機械屋としての原点を見つめ直したい中堅・ベテラン技術者に、機械屋として生きる知恵を提供することを目的とする。
- 〔2〕 内 容 機械(モノ)が主役ではなく、機械屋(ヒト)が主役であるという編集理念のもと、(1)新知識、(2)随想、(3)歴史、(4)企業情報、(5)対談・インタビュー、(6)学習・教育 を主な内容として構成する。
- 〔3〕 配布先 (1) 全会員。
(2) 丸善など主要書店でも販売する。
- 〔4〕 発行回数 3, 6, 9, 12月号の年4回とする。
(1997年度より日本機械学会誌)
- 〔5〕 組 織 (1) メカライフ誌編集のため会誌編修部会に編修委員会を置く。
(2) 編修委員長1名、幹事1名、委員25名以内、編集協力者は全国的に委嘱する。なお、学生会員も若干名委員に加える。
- 〔6〕 校閲方針 (1) 校閲の方針は、メカライフへの掲載に値するか否かとし、誤記の指摘等のマイナーチェンジにとどめる。
(2) タイトル(表題)は、読者に魅力あるようなものにする。
(校閲委員のもとで検討する)
(3) 読みやすさを目的として、必要があれば字句の修正、書き直しや小見出しをつける。
(4) 校閲はメカライフ編修委員が行う。

1. 執筆規定

本誌の記述に際しましては、以下の諸点をご理解の上、ご投稿願います。

- (1) 著作権 会誌に掲載された記事の著作権は原則として本会に帰属するものとする。
- (2) 使用言語 会誌の原稿は原則として日本語とする。
- (3) 単 位 会誌に用いる単位は、SI単位を使用することが望ましい。
- (4) 原稿受付日 原稿受付日は、原稿が本会に到着した日とする。
- (5) 原稿の採否 原稿の採否は本会校閲基準に従い会誌編修部会長(編修理事)が決定する。
- (6) 原稿の責任 会誌に掲載された記事の内容についての責任は、すべて著者が負うものとする。

2. 原稿の作成要領

- (1) 専門外の会員や学生でも気楽に興味をもって読めるような内容、表現で記述してください。
- (2) 文章は本会慣用の口語体とします。特に欧文もしくは、カタカナ書きを必要とする部分以外は漢字まじりひらがな書きとしてください。漢字は常用漢字、かなは新仮名遣いにならってください。
- (3) 用語は、(a)文部科学省学術用語集機械工学編(増訂版)、および、(b)JIS用語を準用願います。
- (4) 本文は読みやすくするため、数個の章立てをしてください。
- (5) 図(写真)および表は1枚ごとに別紙とし、本文原稿の右欄外に図○または表○と記して掲載箇所をご指定願います(図は原稿中にはり付けたり、掲載箇所を示すための空白をつくる必要はありません)。
- (6) 図(写真)、表には内容を的確に表す題目と若干の説明をつけてください。

- (7) 特殊な専門用語や略語は脚注でご説明ください。
- (8) 引用文献は原稿の末尾にまとめて記述してください。本文中で引用する場合は、引用する趣旨をはっきり理解させるようにおまとめください。
- (a) 引用文献の番号は通し番号とし、本文の引用箇所には右肩に小括弧を付して番号をご記入願います。
- (b) 一般に公表されていない文献、たとえば簡易印刷(コピーしたものなど)の委員会報告や社内報告、私信などは引用文献としてあげないことを原則としております。
- (c) 引用文献の記載方法はつぎの形式で記述してください。

— 雑誌の場合 —

著者名(連名者)、論文の表題、雑誌名、巻数—号数(発行年・西暦)、ページ。
(原則としてページ数は、始まりページと終わりページを記入してください。)

[例]

- (1) 新宿太郎・信濃一郎, 新研究発表方法の実施について, 日本機械学会誌, 87-785(1984), 400-406.
- (2) Keer, L. M. and Ahrendt, W. R. , Resonance Effects for a Crack Near a Free Surface, *Trans. ASME, J. Appl. Mech.*, 51-1(1986), 65-70.
- (3) 新宿太郎, 新研究発表方法の実施について, 日本機械学会年次大会講演論文集, No.04-1(2004-9), 1-3.

— 書籍の場合 —

著[編]者名、書籍名、巻[1巻のみの場合は不要]、(発行年・西暦)、ページ、発行所。

(原則としてページ数は、引用したページのみを記入してください。)

[例]

- (1) 新宿太郎, 自動制御理論, (1979), 123, 丸善.
- (2) Ahrendt, W. R. and Keer, L. M. , *Automatic Feedback Control*, (1984), 12, McGraw-Hill.

- (9) お顔の写真(スナップで結構です)ならびにご略歴を掲載いたしたく存じますので同封の用紙に必要事項をご記入の上、原稿の提出時に同封していただければ幸いです。
- (10) 記事中における会社名・製品名の表示について(校閲に際しての考え方)

(a) 宣伝となるような特定会社名、製品名の記載は原則として次のようにする。

- ① 会社名は A 社, B 社等とする。
- ② 製品名は一般化された名称とする(JIS名称など)。

(b) 校閲委員の判断で、記事として特に有用と考えられる場合は、会社名・製品名を記載することができる。

例えば、

- ① 技術史的な記述の中で、会社名や製品名がないと記事そのものが意味を成さない場合。
- ② ケーススタディ的な記事で、実例としては極めて特異な技術や製品を記述した場合。

(11) 原稿送付

原稿は担当職員にメール添付等の方法により電子ファイルをご提出ください。

メカライフ記事の項目別内容

[メカライフの記事(1ページ約2,200字, 図・表含む)
の主要項目別内容は下記の通りある.]

掲 載 欄	内 容
ハイテクノロジー (特集記事)	機械工学, 工業に関する先端技術・製品, プロジェクト等について学生向けにわかりやすく記述する.
歴史・技術史	技術や製品のアイデアや工夫を当時の背景等も含め発想・発展過程等を読み物風(やさしく)に記述する.
サ ロ ン	機械工学・工業に長年たずさわられた方の意見, 感想, 経験談を記述する. 特に若手技術者に興味をひく内容として簡潔に述べる.
対談・インタビュー	技術者として幅の広い経験をお持ちの方に, これからの機械技術者のあるべき姿などについて述べてもらう. -----インタビュー『メカライフな人々』
海外通信 留学生通信	海外に留学している(した)方からの研究所, 研究室などの見聞記.
学習シリーズ	これから新しい専門分野を学びたい方のために, わかりやすく, かつ道案内書となるように記述する. -----しくみシリーズ『知って納得! メカランド』
博物館シリーズ	全国各地の博物館の紹介記事.

学生のページ	
スペシャルレポート	機械工学・工業に関連した技術, 研究所等について学生が中心となり記事を作成(取材)し, その紹介・解説をする. -----訪問記シリーズ
チャレンジ	実際に物を作ったり, それらを使って何かに挑戦している学生にその製品や成果について紹介をしてもらう.
キャンパスアイ	全国の高専, 大学のサークル・クラブ, 研究室の紹介や学内の出来事, 特色あるカリキュラム等の紹介をする.